

第一章…忍びの休息は、甘い香りに包まれて

「にんにん！ 主殿、見てください！ これがあの有名な、山奥の隠れ宿にございますか！」

キヴォトスの喧騒を離れ、たどり着いたのは静かな森に囲まれた老舗の温泉旅館。

車を降りた瞬間、冷たい空気に混じって、ほんのりと硫黄の香りが鼻をくすぐる。

俺の隣でびよんびよんと跳ね回っているのは、自称・キヴォトス最強の忍者を指す少女、久田イズナだ。

いつものノースリーブセーラーと着物を組み合わせた格好に、トレードマークの赤いマフラー。

背中では、感情を隠しきれない大きな尻尾が、まるでメトロノームみたいに激しく左右に振られている。

「主殿、主殿！ イズナ、こういう場所での護衛は初めてでございます。なんだか、古の忍びの里に潜入するような、そんなワクワクした気持ちでありますな！」

潜入っていうか、今日はただの骨休めなんだけど。

そう言うと、イズナはふさふさの狐耳をびこびこ動かしながら、満面の笑みを浮かべた。

「わかっておりますとも！ 主殿の心身の疲れを癒やすのも、忍びの大事を務めにございませう。今日一日、イズナが影に日向に、主殿を全力でおもてなしする所存！」

そう言って胸を張るイズナだけど、そのせいで彼女の豊かな胸元が強調される。

いつ見ても思うが、この子は忍者というにはあまりにも……その、発育が良すぎる。

タイトなセーラー服の生地を内側から押し戻すような、圧倒的なポリウム。

歩くたびに、そして彼女がはしゃぐたびに、その重みを感じさせる弾力が揺れ、俺の視線をどうしても釘付けにしてしまう。

旅館の仲居さんに案内されて部屋に入ると、そこには見事な畳の間が広がっていた。

イズナは「おおお……！」と感嘆の声を漏らし、あちこちを忍者らしく(?)調査し始め

る。

掛け軸の裏を確認し、天井の梁を見上げ、ついには床の間にまで顔を突っ込もうとするので、慌てて止めた。

「はっ、申し訳ございません主殿！ ついつい、不審な仕掛けがないか確認してしまいました。主殿の安全は、このイズナが死守せねばなりませんからな！」

鼻息荒く宣言する彼女の尻尾が、パタパタと畳を叩く。

その可愛らしい様子に、つい頬が緩んでしまう。

「さて主殿。まずは温泉の前に、この『浴衣』というやつに着替えるのが、この里の作法とお聞きしました」

イズナは用意されていた浴衣を手を取った。

……が、そこで彼女はフリーズした。



「……あの、主殿。これ、どうやって着るのが正解なのでございませうか？　いつもの装束とは勝手が違いました……」

首を傾げるイズナ。

「どうやら、帯の結び方や合わせの仕方がよくわからないらしい。仕方ないので、俺が手伝ってあげることにした。」

「えっ、主殿が直々に!?　か、畏れ多いことでございます……!　でも、それなら……お願いしてもよろしいでしょうか」

イズナは頬を林檎のように赤く染め、もじもじしながら俺の前に立った。

彼女がいつもの着物とマフラーを脱ぎ、セーラー服のボタンを外していく。

そのたびに、甘い石鹸のような香りが部屋に広がった。

やがて、白い肌が露わになる。

そこにあっただのは、予想を遥かに上回る、暴力的なまでの曲線美だった。

下着のレースに収まりきらず、こぼれんばかりに主張する大きな胸。  
その重みで、細い肩紐が食い込んでいるのが痛々しくも、酷く煽情的だ。

「……主殿？ そんなに凝視されますと、流石のイズナも恥ずかしく……。その、胸、そんなに珍しいでしょうか……？」

イズナは自分の胸を隠すように腕をクロスさせるが、そのせいでさらに肉が押し上げられ、深い谷間が形成される。

俺は慌てて視線を逸らし、浴衣を彼女の肩にかけた。

「あ、ありがとうございます……」

背後から腕を回し、帯を締めようと密着する。

イズナの体温が、ダイレクトに伝わってくる。

「主殿の手、あったかいですね……」



イズナの吐息が耳元にかかり、俺の指先がわずかに震えた。

帯を前で交差させ、ぎゅっと締め上げる。

「ふえっ!? あ、あう……。主殿、ちよつと、苦しいかも……」

浴衣の合わせの間から、豊かな胸の膨らみが見出しそうになっている。

標準的なサイズの浴衣では、彼女のポリウムを抑え込むのは至難の業らしい。

なんとか帯を結び終えたが、イズナが動くたびに、胸元が大きくなるだけだ。

「主殿、見てください！ イズナ、ちゃんと浴衣姿になりました！」

くるりと一回転するイズナ。

その拍子に、案の定、襟元が大きく乱れた。

白い肌と、その奥に見える膨らみの頂点に近い部分が、チラリと覗く。

「主殿……？　顔が赤いですよ？　もしかして、のぼせてしまいましたか？　まだお湯に浸かる前なのに、不思議ですな」

無防備すぎる。

この子は、自分がどれほど魅力的な身体をしているか、そして俺がどれだけ理性を保とうと必死なのか、全く分かっていない。

「よし！　主殿も着替え終わりましたな。では、いざ参りましょう！　修行……ではなく、温泉へ！　イズナ、主殿の背中を流す準備は万端にございますよ！」

意気揚々と部屋を出ようとするイズナ。

彼女の歩みに合わせて、浴衣の裾からすらりと伸びた太腿が見え隠れする。

温泉、そしてその後のベッドルーム。

今夜は、長い夜になりそうだった。



第二章…秘湯の熱に溶ける、忍びの純情

湯煙が立ち込める露天風呂。

しんしんと冷える夜気とは対照的に、目の前にある岩造りの湯船からは、白く濃い蒸気が立ち上っている。

ここは人里離れた隠れ宿の、さらに奥まった場所にある貸し切りの混浴。他に誰もいない、二人だけの空間。

「……にんにん。主殿、お待たせいたしました」

脱衣所から、震えるような声が響いた。

振り返ると、そこには薄手のバスタオルを一枚だけ身に纏った、イズナの姿があった。

湯気に濡れた髪が頬に張り付き、普段の活発な印象とは打って変わって、どこか儂げで、そして……恐ろしいほどに色っぽい。



「ううっ、やっぱり、主殿の前でこの姿は、修行不足ゆえに緊張いたします……。でも、忍びとして、主殿をお守りする以上、逃げるわけには参りません！」

そう言って覚悟を決めたように一歩踏み出すと、タオルに収まりきらないイズナの豊かな果実が、重力に従ってゆせりと揺れる。

バスタオルの上端が、その重みに耐えかねて今にも滑り落ちそうだ。

彼女が歩くたび、白く滑らかな太腿が露出し、尻尾が不安そうに、でも期待を隠しきれずにゆらゆらと揺れている。

「主殿……。そ、その、あんまり見つめられると、顔から火が出て、お湯に入る前にのぼせてしまいそうです……。っ」

イズナは顔を真っ赤に染めながら、ゆっくりと足をお湯に浸けた。

しかし、彼女は「カナヅチ」だ。

水深はそれほどでもないはずなのに、まるでおどおどした子犬のように、俺の腕を掴んできた。



「はわわ……っ！ 主殿、離さないてくださいっ。この水遁の術の訓練場（お風呂）、意外と深い気がいたします……！」

しがみついてきたイズナの、柔らかくも熱い肌が、俺の腕に密着する。

バスタオル越しでもはつきりと伝わってくる、あの圧倒的なポリユームの感触。

押しつぶされた胸が、俺の肌を包み込むように形を変えていく。

そのあまりの柔らかさに、俺の理性は一瞬で崩れそうになった。

「あ……。主殿、お顔が近いですな……！」

上目遣いで俺を見つめるイズナ。

その瞳は潤んでいて、熱に浮かされたようにトロンとしている。

彼女の吐息は甘く、硫黄の香りさえかき消すような、女の子特有の柔らかな香りが鼻をくすぐる。



「…………んっ」

我慢できずに彼女の唇を奪うと、イズナは驚いたようにピクンと耳を跳ねさせた。しかし、すぐに抵抗を解き、弱々しく俺の肩に手を回してくる。

重なり合う唇から、彼女の熱が流れ込んできた。

控えめに、でも必死に応えようとする彼女の舌が、俺のそれと絡み合う。

「ふぁ…………、はぁっ。主殿…………、すごい、です。頭の中が、真っ白になって…………。忍術の奥義を授かっているような…………そんな気分にございます…………」

銀の糸を引く唇を引き剥がすと、イズナは乱れた呼吸を整えながら、熱っぽい視線を送ってくる。

俺の手は、自然と彼女のバスタオルの結び目に伸びていた。

指先が触れると、彼女の身体が愛らしく震える。

「主殿の手…………、もっど、イズナに触れてください。主殿の温もりを感じると、イズナ、な

んだか……胸の奥が、ぎゅーっとなつて……」

ゆっくりとタオルが解かれ、お湯の中に沈んでいく。

遮るものなくなつた彼女の双丘が、月明かりと湯煙の中で、神々しいまでの存在感を放つた。

張りのある肌、その頂点にある淡い桜色の蕾。

俺がその重みを両手で掬い上げると、イズナは「ひゃうっ！」と可愛らしい悲鳴を上げた。

「あ、ああ……っ！　そこ、は……。主殿、そんなに激しく揉まれると……。イズナ、どうにかなつてしまひそうです……っ」

指先で先端を愛で、手のひらでその柔らかな肉をこねるように動かす。

吸い付くような肌の弾力が、俺の指を心地よく押し返してくる。

イズナは仰け反り、大きな尻尾を激しくお湯に叩きつけて、水しぶきを上げさせた。

「はあ、はあっ、あ……っ！　主殿、主殿お……！　もっど……もっど強く、してほしい……」

です……!!」

彼女の身体は、すでに俺の愛撫を求めて、弓なりにしなっている。俺はさらに身を寄せ、彼女のその豊かな胸の間に、顔を埋めた。

そこには、この世のものとは思えないほどの柔らかさと、温もりに満ちた楽園があつた。

「ふふっ……、主殿。まるで、甘えている子供みたいでありますな。でも……イズナも、こうしているのが、一番落ち着きます……」

イズナは俺の頭を優しく抱きしめ、自分の胸に押し当てた。

彼女の心臓の鼓動が、ダイレクトに耳に伝わってくる。

トクン、トクンと、早鐘を打つようなその音。

「主殿……。イズナ、主殿に必要とされるのが、何よりの幸せにございます……。ですから、好きなだけ……。気が済むまで……。イズナのこと、食べてください……。っ」



甘い吐息を漏らしながら、彼女は俺をさらに深く、その柔らかさの中へと誘っていく。  
温泉の熱と、お互いの体温。

そして、止まることのない情愛の波が、夜の静寂を塗り替えていった。

### 第三章…忍びの秘儀、褥で交わす契りの雫

温泉の熱気に絆され、火照った身体を抱えるようにして部屋へと戻った。

畳の上に並べられた二つの布団。行灯の淡い光が、湯上がりのイズナの白い肌をより一層艶やかに、そして扇情的に照らし出している。

彼女はまだ、はだけた浴衣を辛うじて羽織っているだけだ。

動くたびに、その隙間から豊かな胸の曲線が、まるで意志を持っているかのようにこぼれ出し、瑞々しい輝きを放っている。

「はあ……っ、ふう……っ。主殿……、部屋に戻っても、まだ身体が熱くて……。鼓動が、さつきからずつと、耳の奥まで響いているのであります……。」

イズナは布団の上に膝をつき、潤んだ瞳でこちらを見上げてきた。

大きな狐耳が、落ち着かなげにびくびくと震えている。

彼女の視線が、俺の身体の「ある一点」に固定された。

浴衣越しても隠しきれない、彼女への情動の証。

それを見つけた瞬間、彼女の太い尻尾が、バシバシと激しく畳を叩き始めた。

「……あ、あの。忍びとして、主殿の『不調』を放っておくわけには参りません。それが、たとえこのような……その、破廉恥な修行であつても……！」

イズナは意を決したように、震える手で俺の浴衣に手をかけた。

帯を解き、露わになった俺の熱を、彼女は恐る恐る、でも愛おしそうに両手で包み込む。吸い付くような手のひらの柔らかさと、指先のわずかな震え。

「ひゃっ!? 熱い……。主殿のここ、まるで生き物みたいに、ドクドクと脈打っておりますな……。んっ、ふふっ……。イズナの手、気持ちいいでしょうか？」

彼女は慣れない手つきで、上下にゆつくりと手を動かし始めた。

時折、長い爪がかすかに触れるのが、かえって心地よい刺激となって脳を焼く。

彼女が動いたたびに、浴衣の襟元がさらに大きく開き、そこにある二つの大輪の果実が、俺の目の前でゆっさゆっさと揺れ動く。

その光景に、俺の呼吸はさらに荒くなっていく。

「……もつと、もつと主殿に喜んでいただきたいのであります。……にんにん。忍法……口寄せの術、でありますっ！」

イズナは顔を真っ赤にしながら、ゆつくりと身を乗り出した。

そして、零れるような吐息とともに、彼女の小さな唇が、俺の最奥を包み込んだ。

「はふっ……。んっ、んぐっ……」

口腔内の熱い湿り気。



舌が、裏筋を丹念になぞり、先端を優しく転がす。

彼女が不器用ながらも必死に吸引するたび、喉が鳴る音が聞こえてくる。

上目遣いでこちらを伺う彼女の瞳は、快感と献身の色に染まりきっていた。

「んう、ちゅ、ぶはっ……。……はあっ。主殿の味、なんだか……。身体の奥まで溶けてしま  
いそうな、不思議な味がいたします。……もつと、していいですか？」

今度は、彼女が誇るその圧倒的な武器が、俺の熱を挟み込んだ。

左右から押し寄せる、柔らかなすぎる肉の壁。

イズナの大きな胸が、俺の質量に負けてむぎゅりと形を変え、完全に覆い隠してしまう。

「ふあ……。っ、これ、すごいですっ。主殿とイズナの身体が、一つの術式みたいに、ぴった  
りと重なって……。！ あ、ああ……。っ、熱い、熱いですよ……。！」

彼女は自分の胸を両手で寄せ、さらに圧力を強めてくる。

上下に身体を揺するたびに、先端が彼女の顎や、鎖骨を打つ。

そのたびに、彼女の大きな尻尾が、まるで意思を持った生き物のようにぐるぐると旋回し、部屋の空気をかき混ぜた。

「はあ、はあ、んっ……！ 主殿の……大事なものを、イズナの胸の中で、どんどん大きくなって……。ああっ、もう、我慢……しなくて、いいんですよ……？」

彼女の甘い囁きが、理性の最後の一線を断ち切った。

限界まで高まった熱が、彼女の胸の谷間へと解き放たれる。

「ひやつ！？ あ、ああ……っ！」

真っ白な雫が、彼女の豊かな胸を、そして上気した顔を汚していく。

イズナは、その熱い衝撃に目を見開き、耳をピンと立てて硬直した。

だが、彼女はすぐに、口元にかかったそれを、指で掬い取った。

「……ふふっ。主殿の……一番、大事なところ。一滴も、無駄にはいたしません」

彼女は躊躇うことなく、その指を口に含んだ。

それどころか、胸の上に散った雫を、まるで愛しい宝物を慈しむように、丁寧に、丁寧に舌で舐め取っていく。

「んっ、ちゅ、れる……。……。んぐ……。……。ふはあ……。……。ごちそうさまでした……。……。主殿の全部、イズナの中に、ちゃんと受け止めましたよ」

喉を鳴らして飲み込んだ彼女は、とろんとした表情で微笑んだ。

その口端に、まだわずかに残る白い名残。

イズナはそれを、べろりと舌で拭い取ると、そのまま俺の胸へと倒れ込んできた。

「……。はあつ。主殿……。イズナ、なんだか……。さつきよりも、もっともつと、主殿のことが……。……。あう、これ以上は、言葉にできませんな……。」

幸せそうに目を細める彼女の尻尾が、今度はゆっくりと、俺の足に絡みついてくる。

夜はまだ、始まったばかりだ。

彼女の火照りは、収まるどころか、より深い色を帯び始めていた。

#### 第四章…秘伝の双丘、重なり合う魂の共鳴

行灯の光が、乱れた布団の上でゆらゆらと揺れている。

先ほど放たれたばかりの熱い余韻が、イズナの白い胸元に真珠のような雫となって散っていた。

彼女はそれを指でなぞり、頬を朱に染めながら、荒い息をついている。

「……はあ、はあっ。……すごかった、であります。……でも、まだ……、身体の芯が、ずっと熱くて。……もっど、もっど……欲しくなってしまうのは、忍びとして……失格でしょうか？」

イズナは潤んだ瞳でこちらを見上げると、膝立ちのまま、再び自分の豊かな胸を両手で寄

せた。

先ほどよりもさらに充血し、張りを増した二つの果実。

その間に、再び熱を帯びた俺の証を挟み込む。

「んう……っ、さつきよりも……ずっと、硬いです……。……ふふっ、これなら、イズナの『修行』も、もっと激しくしないと……。いけませんな」

彼女は自分の大きな胸をこれでもかと密着させ、上下に、そして左右に、ねっとり擦り付けるように動かし始めた。

柔らかすぎる肉の壁が、俺の熱を完全に吞み込み、押し潰せんばかりの圧力で包み込む。イズナが腰を揺らすたびに、ふさふさとした大きな尻尾が、まるで生き物のように畳を叩き、部屋の中に熱い風を送る。

「あ……ああっ、はあ……。っ！……。これ、すごい……。……熱いのが、胸の奥まで……。伝わってきます……。っ！……。んっ、んぐ……。っ」



彼女は胸の動きに合わせて、再び唇を寄せてきた。

俺の先端が、彼女の顎や首筋を、そして豊かな鎖骨の谷間を叩く。

そのたびに、イズナは甘い悲鳴を上げ、狐耳をピクピクと激しく震わせる。

「……ああっ、もう……っ！ ……出る、出ちゃいます……っ！ ……受け止めて……くださいっ！」

彼女の圧力が最高潮に達した瞬間、再び熱い奔流が放たれた。

真っ白な雫が、彼女の顔、そして愛らしい耳の付け根にまで飛散する。

「……ふぁ……っ！ ……はぁ、はぁ……、んっ……」

イズナは顔を汚されたまま、放心したように目を見開いていた。

しかし、その表情は苦痛ではなく、至上の幸福感に満たされている。

彼女は舌を出して、頬を伝う一滴をそっと舐め取ると、とろんとした視線でこちらを捉えた。



「……あう。……こんなに、たくさん……。……でも、まだまだ……。足りない、でありま  
す。……もっと……。心の、奥の奥まで……。繋がって、ほしいです……」

彼女は自ら浴衣を完全に脱ぎ捨てた。

露わになったのは、汗で光る美しい曲線と、期待に震える秘部。

イズナは仰向けに横たわり、自らの脚を大きく開き、誘うように腰を浮かせる。

「……にんにん。……忍法、隠れ里の……。ひ、秘密の儀式……。にございます……。つ……。  
さあ、……。早く、入れて……。ください……。っ！」

促されるまま、彼女の熱源へと己を沈める。

そこは、驚くほどに熱く、そして密やかで、俺を逃がさないという強い意志すら感じせ  
せるほどに締め付けてきた。

「は、ひあつ!? あ、ああああ……。っ! ……大きい……。……。全部、入って……。きちちゃ

いました……っ！」

イズナは大きくのけぞり、シーツをぎゅっと掴んだ。

彼女の尻尾が、布団を激しくかき乱す。

一突きするごとに、彼女の喉からは、今までに聞いたこともないような甘い嬌声が漏れ出す。

「……んっ、あ……ああっ！……そこっ、そこ、すごいですっ！……脳みそまで、溶けちゃう……っ！……はあ、はあ、……ああっ！……いい、いいです……っ！……もっど、もっど……奥まで……突いて、ください……っ！」

彼女の豊かな胸が、衝撃に合わせて上下に激しく波打つ。

俺は、その揺れる双丘を力強く掴み、彼女の胎内をさらに深く探った。

イズナの熱い壁が、俺の動きに合わせて吸い付くように収縮し、至福の快感を与えてく



「…………あ、あぁっ！ ……もう、だめ…………っ！ ……イズナ、…………行っっちゃいます…………っ！  
…………一緒に、一緒に…………術を、完成させましょう…………っ！」

限界が近いことを悟った彼女は、俺の首に腕を回し、力強く引き寄せた。

互いの汗が混じり合い、熱い鼓動が重なり合う。

俺は最後に、彼女の最深部を力強く穿った。

「…………っ！ あ、あぁあぁあぁあぁー…………っ！」

イズナの身体が弓なりにしなり、絶頂の震えが二人を包み込む。

だが、俺は抜かなかった。

最後の力を振り絞り、彼女を布団に押し倒すと、昂ぶったままの熱を彼女の顔の至近距離まで持っていく。

「…………あ、あぁ…………。…………まだ、出るの、ですわ…………」



イズナは期待に満ちた瞳で、俺の先端を見つめている。  
そして、最後の一撃が放たれた。

「……………っ！ はふぁっ……………!?!？」

彼女の整った顔立ちが、次々と放たれる白い熱によって白く染まっていく。

瞼を閉じ、銀色の雫をまつ毛に付着させたまま、彼女はうっとりとその衝撃を受け止めていた。

「……………はあ、……………はあ。……………んっ。……………全部……………。……………お顔、……………ベタベタに……………なっちゃいました……………な……………」

イズナは力なく笑いながら、指で自分の顔を拭い、それをゆっくりと味わった。

その姿は、キウオトス最強を目指す忍者というよりも、ただ愛されることを悦びとする一人の少女そのものだった。



「…………ふふつ。…………これ、…………イズナの、宝物…………にいたします…………。…………あう、…………ても…………、なんだか…………、もう、…………腰が抜けちゃって…………。…………明日、修行…………できるでしょうか…………？」

幸せそうに目を閉じ、余韻に浸るイズナ。

彼女の尻尾は、今はもう穏やかに、俺の足首を優しく撫でていた。

## 第五章…一生解けない忍びの結び、永遠の契約

行灯の灯火が小さく揺れ、部屋の中には甘く、どこか懐かしい香りが充満している。

先ほどまでの激しい「修行」の余韻が、湿り気を帯びた空気となって肌にまとわりついていた。

布団の上で横たわるイズナの身体は、湯上がりよりもずっと赤く火照り、その白い肌には、俺が刻んだ愛の証が点々と花を咲かせている。



「はあ……っつ、はあ……っつ。……すごかった、であります。……身体の中が、まだ、じわじわとして……。……忍びとして、これほどまでに骨抜きにされるとは……。……不覚にございませぬ……」

イズナは力なく笑いながら、俺の腕の中に潜り込んできた。

汗ばんだ肌がびたりと吸い付き、その熱量がダイレクトに伝わってくる。

彼女のトレードマークである大きな狐耳は、今は力なく伏せられ、時折思い出したようにピクピクと痙攣している。

だが、その大きな尻尾だけは、まだ満足しきれないのか、俺の足にねっとり絡みついて離れようとしない。

「……ねえ。……さっきの、……すっごく、気持ちよかった……。……ですよ？ ……胸の奥が、ぎゅーっとなつて、……。……なんだか、……。……もつと、もつと……。……って、……。……心が、叫んでいるのであります……」

イズナは顔を上げ、潤んだ瞳でじっと俺を見つめた。



その視線には、護衛としての使命感など微塵もなく、ただ一人の愛する男を求める、熱い欲求だけが渦巻いている。

彼女は俺の手を取り、自らの豊かな胸へと導いた。

「……………あう。……………ほら。……………まだ、こんな……………ドキドキ……………いつてるですよ？……………主殿のせい、……………ですからね……………？」

その言葉と共に、彼女の身体が再び熱を帯び始めた。

指先に触れる心臓の鼓動が、早鐘を打つように早まっていく。

イズナは俺の首筋に鼻を寄せ、深く、深く、その匂いを吸い込んだ。

「……………くん、くん……………。……………んっ……………主殿の、匂い……………。……………これ……………イズナを、狂わせる……………秘伝の薬……………みたいであります……………っ……………。……………もう、我慢……………できない……………ですよ……………っ！」

彼女は俺を布団に押し倒すと、今度は自ら跨ってきた。



はだけたままの身体。

月明かりに照らされたその双丘は、先ほどよりもさらに充血し、先端は誇らしげに天を突いている。

イズナは自らの手で、再び硬さを取り戻した俺の証を導き、その熱源へとゆっくりと、だが確実に沈めていった。

「ひゃうっ!? ああ……あああああ……っ!!」

二度目の結合。

一度目よりもずっと滑らかに、そして深く。

彼女の胎内は、俺を迎え入れる準備が完璧に整っていた。

イズナは大きく仰け反り、首筋を美しく反らせる。

「……ああ、……ああっ! ……入った、……全部、……入っちゃいました……っ! ……さつきよりも、……ずっとずっと……奥まで……届いてるですよ……っ!」

彼女は腰を回し、内側の肉で俺を逃がさないように締め上げる。

その快感に、俺も思わず声を漏らした。

イズナはそれに応えるように、さらに激しく身体を揺らし始める。

「……………んっ、あ……………ああっ！ ……いい、……………いいですよっ！ ……もっど、……………もっど……………  
いじめて……………ください……………っ！ ……主殿の……………全部で、……………イズナを……………ぐちゃぐちゃ  
に……………して……………っ！」

彼女の豊かな胸が、衝撃に合わせて荒れ狂う波のように揺れ動く。

俺はその重みを両手で掴み、指が食い込むほど強く握りしめた。

「ひあっ！？ あ、ああ……………っ！ ……胸、……………痛いくらい、……………ぎゅーって、……………され  
て……………っ。……………でも、……………それが……………たまらなく、……………幸せ……………なんです……………っ！」

イズナの大きな尻尾が、荒れ狂う嵐のように畳を叩きつける。

彼女の呼吸は完全に乱れ、甘い吐息が部屋中に響き渡る。

互いの汗が混じり合い、肌と肌がぶつかり合う音が、夜の静寂をかき消していく。

「……あ、ああっ！ ……くる、……くるですよ……っ！ ……さっきより、……もっと……大きい……っ！ ……あ、あああああーっ！」

絶頂の波が押し寄せる。

俺は彼女の腰を引き寄せ、その最深部へと、己のすべてを叩きつけた。

「……っ！」

言葉にならない叫び。

イズナは俺の背中に爪を立て、必死にしがみついてくる。

その瞬間、熱い奔流が彼女の胎内を、隅々まで満たしていった。

「……あ、ああああ……っ！ ……熱い、……熱いのが……いっぱい、……入って……くる……っ！ ……あ、ああ……っ。……主殿の……命、……イズナの中に……っ！」

彼女の身体は激しく痙攣し、俺を逃がさないように何度も何度も収縮を繰り返す。

俺もまた、彼女の与えてくれる至上の快感に身を任せ、意識が遠のくほどの絶頂を味わった。

やがて、激しい嵐が去り、部屋に静かな時間が戻ってくる。

繋がったまま、折り重なるように倒れ込んだ二人。

イズナの胎内からは、溢れ出した白い情愛の雫が、彼女の太腿を伝ってシーツを汚していた。

「……はあ、……はあ……。……んっ。……すごかった、……ですね……」

イズナは俺の胸に顔を埋め、消え入りそうな声で囁いた。

その顔は、涙と汗、そして至福の表情でぐちゃぐちゃになっている。

「……イズナ、……こんなに……。気持ちよくなったの、……。初めて……。てあります。……主

殿と……一つになれて、……本当に……幸せ……」

彼女は震える手で俺の頬を撫で、愛おしそうに目を細めた。

「……ねえ。……これからも、……ずっと……イズナのそばに、……いてくれますか……？」

問いかける彼女の耳が、不安げに少しだけ垂れる。

俺が黙って彼女を抱きしめると、イズナは嬉しそうに、でも少しだけ泣きそうな顔で微笑んだ。

「……ふふつ。……わかってます。……忍びは、……主君に……一生……ついていくもの、……ですからね」

彼女は俺の腕の中で、満足げに目を閉じた。

その尻尾は、今はもう穏やかに、ゆっくりりと、幸せなリズムで揺れている。

窓の外では、月が静かに二人を照らし続けていた。

一生解けることのない、愛の結び目を。

「…………おやすみなさい。…………愛して…………います、…………主殿…………」

小さな、だが確かな愛の告白と共に、彼女は深い眠りへと落ちていった。

エピローグ…忍びの恋路は果てしなく、主殿と綴る未来の巻

温泉旅館での夢のような時間から、数日が過ぎた。

キヴォトスの日常に戻っても、あの夜の熱だけは、未だに肌の奥底にこびりついて離れない。

シャーレの執務室、あるいは忍術研究部の部室。場所はどこであれ、ふとした瞬間に、あの時のイズナの甘い喘ぎ声や、白く濁った情愛の雫を飲み込む時の喉の音が脳裏に蘇る。

今夜は、誰にも邪魔されない二人だけの時間。

静まり返った部屋の中で、イズナはいつもの忍装束……ではなく、あの夜を思い出させるような、はだけた着物姿で俺の前に座っていた。

「……にんにん。主殿、お疲れ様でございます。……あの、……その後、お体の方が変わりはございませんか？ イズナ、……あの夜のことが忘れられなくて、……修行にも身が入らないのであります……っ」

彼女は頬を真っ赤に染め、大きな狐耳をべたんと伏せて、上目遣いでこちらを見てくる。

その瞳は、温泉の時よりもずっと深く、ねっとりとした欲情の色を帯びていた。

太い尻尾が、畳の上でソワソワと左右に揺れ、彼女の隠しきれない期待を物語っている。

「……主殿。……イズナ、……あの日から、ずっと考えていたのであります。……主殿を護衛する忍びとして、……もつと、……もつと主殿を気持ちよくさせて差し上げるのも、……大事な務めなのではないかと……！」

イズナは意を決したように、膝立ちで俺に近づいてきた。

彼女が肩をすくめるたびに、ノースリーブのセーラー服を押し上げるような、あの暴力的なポリウレムの胸がゆさゆさと揺れる。

彼女は俺の前に跪くと、震える手で俺のベルトに手をかけた。

「……見ていてください。……イズナ、……あれから一人で、……こつそり特訓した成果を……っ！」

彼女の手によって露わになった俺の熱源。それを見た瞬間、イズナの瞳が一層潤んだ。

彼女は自分の着物をさらに広げ、その白く、重みのある双丘を惜しげもなくさらけ出した。そして、左右から俺の熱を、押し潰さんばかりの勢いで挟み込む。

「んっ……、はうああっ……。……やっばり、……主殿のは、……大きくて、……熱いです……。……イズナの胸、……はち切れそうなくらい、……ぎゅーって、……されてるですよ……。っ」



彼女は自分の胸を両手で強く寄せ、上下に、そしてねっとり円を描くように動かし始めた。

柔らかすぎる肉の壁が、俺の熱を呑み込み、先端に彼女の柔らかな肌が何度も擦れる。イズナは自分の胸の形が変わるのを見て、恥ずかしそうに、でも誇らしげに吐息を漏らした。

「はあ、……はあっ、……あ……ああっ！……主殿、……どうですか……？……イズナのこれ、……気持ちいい……ですか……っ？……んっ、……ちゅ……。……ふふっ、……主殿の……ドクドクしてるの、……イズナの胸を通して、……心臓まで……響いてくるですよ……っ！」

彼女はさらに圧力を強め、時折、先端を彼女の顎や首筋に押し当てる。

銀色の唾液が彼女の胸の谷間に滴り、摩擦をさらに滑らかでエロティックなものへと変えていく。

イズナの大きな尻尾が、快感に耐えかねて激しく畳を叩く。



「……あ、ああっ！……主殿、……顔、……もっと近くに……。イズナの、……この揺れるの、……ずつと……見ていて……ください……っ！……ああ、……んっ……！……もう、……もう……っ！……出すなら、……イズナの、……胸の……真ん中に……っ！」

限界まで高まった熱が、彼女の叫びと共に解き放たれる。

真っ白な雫が、彼女の豊かな胸を、そして上気した顔を汚していく。

「……はふあっ！？……あ、あああ……。っ……。……すごい……。……いっばい、……かかっ  
ちやいました……。な……。」

イズナは力なく笑いながら、胸の上に散った熱い名残を指で掬い取った。

そして、それを愛おしそうに舐め取り、とろんとした表情でこちらを見上げる。

「……でも、……まだまだ……。足りない、……。てあります……。胸だけじゃ……。、ダメ……。  
なんです……。……イズナの、……。中まで……。、もつと……。主殿で、……。いっばいにして……。  
ほしいです……。っ！」

彼女は自ら床に横たわり、脚を大きく開き、秘部を晒した。

そこは既に、俺を迎え入れる準備が整いすぎており、蜜が溢れ出している。

俺は彼女の腰を掴み、その熱い最深部へと、一気に己を沈めた。

「ひゃうああつ!? あ、あああああ……っ!」

イズナは大きくのけぞり、狐耳をピンと立てて硬直した。

繋がった瞬間の、圧倒的な充足感。

彼女の内壁が、俺を逃がさないように、驚くほどの力で締め付けてくる。

「……はあ、……はあ、……んっ! ……ああ、……ああっ! ……主殿っ、……主殿おっ!  
……すごい……っ! ……脳みそ、……溶けちゃう、……っ! ……幸せすぎて、……  
イズナ、……どうにかなっちゃいそう……ですよ……っ!」

彼女は俺の首に腕を回し、顔を埋め、甘い喘ぎ声を俺の耳元で爆発させた。

腰を突き入れるたびに、彼女の豊かな胸が激しく波打ち、俺の腹部を叩く。

イズナの尻尾は、俺の脚に強く、強く絡みつき、二人を一つの生き物のように繋ぎ止めていた。

「……あ、ああっ！ ……そこっ！ ……そこ、……イズナの……一番、……弱いところ……っ！ ……んっ、……ああっ！ ……いい、……いいですっ！ ……もっど、……もっど……奥まで……、全部……出し切っちゃって……ください……っ！」

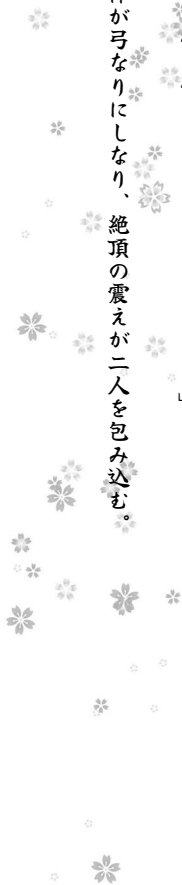
絶頂が近い。

彼女の胎内は、俺を絞り出そうとするかのように激しく収縮し、至福の快感を与えてくる。

俺は彼女の腰をさらに引き寄せ、最後の一撃を、彼女の魂の奥底へと叩きつけた。

「……っ！ ……あ、あああああ——っ！」

イズナの身体が弓なりにしなり、絶頂の震えが二人を包み込む。



最深部へと放たれる、熱い、熱い命の奔流。

「……………はあ、……………ああ……………っ。……………入ってる、……………入ってるですよ……………っ。……………主殿の……………熱いの、……………イズナの……………一番……………大事なところに……………っ。……………あ、ああ……………。……………幸せ、……………幸せすぎて……………、……………死んじやいそう……………であります……………っ」

彼女は俺を抱きしめたまま、何度も、何度も、内側の肉で俺の熱を噛み締める。

一滴も逃がさないという、彼女の強い執着と愛が、その締め付けから伝わってきた。

やがて、激しい鼓動が徐々に静まっていく。

繋がったまま、額を合わせ、お互いの熱い息を交換する。

「……………ふふっ。……………主殿。……………イズナ、……………今……………世界で一番、……………幸せな忍者……………にごぞいます」

イズナは、涙で潤んだ瞳を細め、至上の幸福感に満たされた笑顔を見せた。

「……イズナの、……この身体も、……この心も……。……全部、……全部……主殿のものです。……だから……これからも、……一生……。……イズナのこと、……離さないで……くださいね……。？」

彼女の尻尾が、穏やかに、でも力強く、俺の身体を撫でる。

外の世界がどうあろうと、この部屋の中だけは、二人だけの、永遠に解けない絆で結ばれていた。

「……愛して、……います。……主殿と、……イズナの……未来に……にんにんっ」

彼女は俺の唇に、優しく、そして深い誓いのキスを落とした。

忍びの恋路は、これからも、ずっと、ずっと続いていくのだ。俺たちの、望むままに。

く完く

